



〈まるで、賢治の詩のような〉

ジャーナリスト
松本 侑壬子

イタリアで実際にあった詐欺事件から着想を得たという映画だが、聖書の世界から宮沢賢治の詩にも通じる寓話的な人間像に心打たれる。

驚いたことにイタリアには二十世紀も終わり近くまで農園の小作制度(分益小作制度)が残っていた。一九八二年に法律で廃止され、賃貸借契約または賃金労働へと変わったのだが、領主がそれを農民らに隠したまま搾取を続けるという悪質な詐欺事件が発覚、新聞記事を読んで衝撃を受けたロルヴァケル監督が映画化を決めたという。

舞台は、イタリアのある貧しい小さな村。険しい岩山と深い溪谷に阻まれて、村人は外の世界を知らない。丘の上には領主デ・ルーナ侯爵夫人(ブラスキ)の邸宅が聳え立つ。村人たちは侯爵夫人の小作人としてたばこ農園で激しい労働と、食べるものにも事欠く厳しい日々を送っていた。とりわけよく働

く若者ラザロ(タルディオオーロ)は、超が付くほどのお人好しで、仲間から押し付けられることは何でも文句ひとつ言わず引き受けていた。まるで「雨ニモマケズ、風ニモマケズ」の宮沢賢治の詩の主人公のように。この小さな村では、領主が村人を搾取し、村人はラザロを搾取しているのだった。

ある日、町から侯爵夫人の息子タンクレデイ(チコヴァーニ)がやってくる。息子は退屈しのぎに母親を困らせようと、ラザロに手伝わせて自作自演の誘拐事件をでっち上げる。岩山にあるラザロの秘密の隠れ場で「俺たちは兄弟だ」と言われた言葉をラザロは決して忘れない。侯爵夫人は息子の嘘を見抜き、身代金要求を無視する。ラザロは突然高熱に倒れ、生死の境を彷徨う。が、目覚めるとタンクレデイのために食料を運ばねば、とふらつく足で山道を登るうちに足を滑らせ谷底へ。

一方、この事件を警察に通報したことで、村の実態が明るみに出てしまう。警察から村の小作制度の廃止のことを告げられて途方に暮れる村人たち。永年の中世の奴隷農民のような生活から解放され、迷いながらも全員が村を去る。ラザロのことは、誰も気にしない。

だが、ラザロは生きていた。野生の狼に救われたのだ。村に戻るとそこは廃墟となっていた。屋敷に泥棒に入った元村人について町へ。村の生活に比べて、都市生活は夢のような別世界だが、弱者はここでも収奪される。町の吹き溜まりのような片隅で、生き延びるために身を寄せ合って暮らす村人たちが、思いがけないところで、ラザロはタンクレデイに再会する。歳月は、かつてのほっそりした美青年の風貌を中年太りの実業家に変貌させていた…。

まるでファンタジックな寓話のような話の面白さ。ラザロはどんな時でも黙って他人のために働く若者だ。不当な扱いを受けても、不思議と嫌悪感がないのは、見る側も人の善意を信じるラザロの清らかな視線になっているのかもしれない。聖書の中の、キリストにより死後四日目に甦ったというあのラザロも、こんな無垢な瞳をしていたのだろうか。

『幸福なラザロ』

イタリア映画(127分)

監督:アリーチェ・ロルヴァケル

出演:アドリアーノ・タルディオオーロ、ニコレッタ・ブラスキ、ルカ・チコヴァーニ、アルバ・ロルヴァケル

公開中

©2018 tempesta srl • Amka Films Productions • Ad Vitam Production • KNM • Pola Pandora RSI • Radiotelevisione svizzera • Arte France Cinema • ZDF/ARTE

